



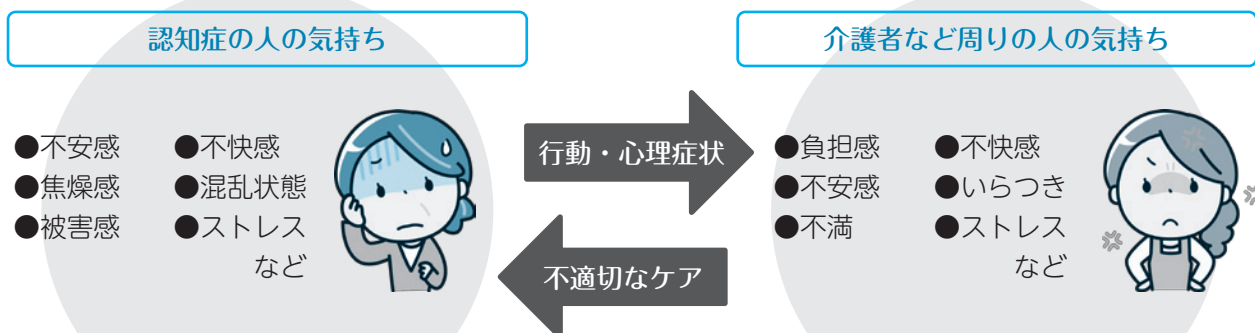
認知症を知る

～認知症の人との接し方①～

認知症の大きな特徴は、自分が病気であるという意識（病識）が乏しいことが挙げられます。そのため、認知症の人と接したり、ケアしたりする際は、周囲の人がそのことを知り、配慮して対応することが、症状の悪化や進行の予防にもつながります。

認知症の人との関係（悪循環の例）

認知症という病気について理解していないと、「何度言ったらわかるの!」「どうしてそんなことをするの!」などと認知症の人を傷つける言動になったり、怒鳴ったりしてしまいます。そうすると、認知症の人は追い詰められ、より症状が悪化し、悪循環を招くことにつながります。



認知症の人はどんな気持ちでいるのでしょうか

ほとんどの人は認知症の初期には自分に何か異変がおきていることには気づいていると考えられます。次のような気持ちになっていることが多いようです。

○不安で孤独だ

「自分に何がおきているのだろう」
「この先どうなるのだろう」

○情けない、屈辱だ、悔しい

「どうしてこんなことができないのか」「バカにされた」
「以前は自信を持っていたのに」

○迷惑をかけている、役に立ちたい

「家族に申し訳ない」「今までのように役立ちたい」



認知症の人はこのような不安や孤独を感じ、大きなストレスを抱えています。そこにきつい言葉や対応があると、さらに傷つき、混乱し、認知症の進行も早くなってしまいます。

不思議な行動はなぜ起こる？

認知症が進むと、押し入れに食べ物をしまったり、汚れ物を引き出しに入れたりするなどの行為がみられることがあります。これは冷蔵庫や洗濯機が分からなくなったり、対処の仕方が分からなくなったりするなかで、本人なりに対処しようとした結果と考えられます。

認知症の悪循環を避けるためにも、責めるのではなく、できることをほめたり、今の状態をできる限り理解することに努め、笑顔で接することができる工夫や介護者一人で抱え込まないことが大切です。

1人で抱え込みそうな時は迷わずご相談ください

多久市地域包括支援センター（多久市役所 福祉課内） ☎75-6033

